

東京都立大学一時保育施設「都立大KIDS」

各所で新型コロナウイルス感染症の影響があらわれていますが、「都立大KIDS」では、みなさまが安心して利用できるように、検温やこまめな手洗い、マスクの着用といった基本的な対策をはじめ、毎日行っている室内の各所やおもちゃ、事務機器類などの消毒、清掃、こまめな換気なども、さらに徹底して行っています。そのうえで、子どもたちが楽しく遊ぶことができるよう、新しいおもちゃ作りや季節に合わせた遊びなどを工夫しています。

何かと気づまりなことの多い昨今ですが、そんな時こそ、子どもたちが楽しく遊ぶことができ、親御さんも安心して預けられる時間と空間を大切にしたいと思います。(藤山)



ご利用には事前登録が必要です。詳細はWEBサイトをご覧ください。
東京都立大学ダイバーシティ推進室 一時保育施設のページ
<http://www.comp.tmu.ac.jp/diversity/child/index.html>

ダイバーシティ推進室 公式「Twitter」



ダイバーシティ推進室の公式Twitterアカウントを作成しました。ダイバーシティ推進室主催のイベント情報を中心に、ダイバーシティ推進室の取り組みや各種お知らせなどをつぶやいています。
@diver1_official をフォローして、つぶやきをチェックしてください。

オンライン相談

ダイバーシティ推進室では、専門相談として、キャリアコンサルタント技能士によるライフ・ワーク・バランス相談、助産師による女性の健康相談を行っています。また、ダイバーシティ推進室の専任研究員による障がいに関する相談や、セクシュアル・マイノリティに関する相談も受け付けています。対面による相談のほか、電話やメール、zoomなどを用いたオンライン相談も可能です。ダイバーシティ推進室のWebサイトからお問い合わせください。

コラム ダイバーシティ推進室 特任研究員 横山家の育児

眠る前のひと時、寝室で子ども達と遊んだり、絵本を読んだりして過ごします。子ども達も心待ちにしているようで、楽しい時間です。しかし、消灯になると子ども達は妻に寄り添って眠るため、ベストポジションの奪い合いを始めます。1歳の双子は派手に争い、4歳の長女は控えめに位置取りをします。3人の相手は大変だろうと私が抱っこするも、すり抜けて妻のところへ戻ります。「あなたじゃないよ」と言われているような気になりますが、暗闇になると妻でないとダメなのです。

しかし、自宅で過ごすことが多かったコロナ期間が影響しているのか、最近は私に寄り添いながら眠ることがあります。安心して眠ってくれると、夜の不安、暗闇の不安を和らげることが出来たかな、と嬉しくなります。

中々子ども達と一緒にいらませんが、眠る前のひと時だけでも同じ時を過ごしたいです。ともに過ごす時間が「母親」「父親」の役割を柔軟にしてくれそうです。(横山)



コラム 学長室職員 児玉家のnew baby

2020年2月に2人目となる長男を出産しました。今回の出産に際しては、夫が約5ヶ月の育休を取得しました。育休中の夫は、息子の寝かしつけのスペシャリストになったり、当時登園自粛中だった娘の相手を全力でしてくれたり大活躍でした。

歩くこともままならないまま夜中の授乳で寝不足が続く産後期間、常に夫がいてくれたことはとても心強かったです。無理をすれば一人でもできたでしょうが、一人で全て抱えなくて良いと思えるだけで、心穏やかに過ごせたなあと振り返っています。

4年前の長女の出産時は、母親である自分が全てやらなければと思い込み、夫にさえもうまく頼ることができませんでした。男性の育休も、全ての家庭にプラスに働くとは思いませんが、何らかのかたちで誰かに、何かに頼ってみることも、子供の笑顔を守るために必要なことだと思っています。(児玉)



Contents

1 「セクシュアル・マイノリティに関する東京都立大学の対応ガイドライン」発行

2 コロナ下における障がい学生支援
パソコンノートテック講習会(基礎編・速読編)
ミニ手話講習会
寄稿「コロナ下の支援活動」

3 障がい者支援スタッフ制度説明会&歓迎会
障がい者支援スタッフ・利用学生振り返りミーティング
障がい者支援スタッフ勉強会

4 東京都立大学一時保育施設「都立大KIDS」
ダイバーシティ推進室公式Twitter
オンライン相談
コラム「横山家の育児」
コラム「児玉家のnew baby」

No.27 September 2020 Newsletter

ダイバーシティ通信



「セクシュアル・マイノリティに関する東京都立大学の対応ガイドライン」発行

さらなるダイバーシティ推進に向けて



その人がセクシュアル・マイノリティの当事者であるかどうかということは、他者が外見から判断できるものではありません。したがって、実際に当事者が身近にいても、周囲の人にはわからないことも多く、結果として「自分の身近には当事者はいない」と考えることも少なくありません。しかし、さまざまな研究結果から、セクシュアル・マイノリティの当事者の割合は人口の3~10%程度と推測されています。また、2019年に国立社会保障・人口問題研究所が大阪市で行った大規模調査においては、回答者のうち3.3%がレズビアン・ゲイ・バイセクシュアル・トランスジェンダー・アセクシュアルのいずれかに該当するという結果が出ていることから、セクシュアル・マイノリティの当事者は身近に存在していることが理解されます。このような現状を踏まえ、本ガイドラインが多様な性のあり方への認識を深め、偏見を取り除き、本学のさらなるダイバーシティ推進の一助となることを願います。

本ガイドラインは、今後もその内容について検討を重ね、より実態を反映した情報になるよう、適宜アップデートを行っていく予定です。内容についてのご意見や情報提供など、ダイバーシティ推進室までお寄せいただけますと幸いです。(藤山)

東京都立大学では、2011年3月に発表した「ダイバーシティ推進宣言」、およびそれに基づいて定められた「ダイバーシティ推進基本方針」のもと、多様な人々が大学のあらゆる場における活動に同様に参加し、等しく尊重される大学を目指した取り組みが行われています。こうした取り組みの一環として、セクシュアル・マイノリティに関する本学での対応状況や、基本的な情報をまとめた『セクシュアル・マイノリティに関する東京都立大学の対応ガイドライン』を作成しました。

- 主な内容は、以下の通りです。
- ダイバーシティ推進室で行っているセクシュアル・マイノリティに関する相談の概要
- ダイバーシティ推進室以外の学内相談窓口案内
- 当事者が大学生活で困りがちなことや、それに対する対応・配慮の原則
- 通称名使用や健康診断受診時の配慮、多目的トイレの設置やレインボーマークの作成など、本学が現在行っている取り組みの紹介
- LGBTやアライなど、セクシュアル・マイノリティに関する用語や基礎知識の解説

セクシュアル・マイノリティに関する東京都立大学の対応ガイドライン



編集後記



コロナウィルスの影響で異例のスタートとなった今年度は、新入生や新しく支援に関わってもらえる皆さんとも直接お会いできる機会がまだありませんが、ダイバーシティ推進室は図書館本館1階奥にあります。学内の出入りが自由になった際にどなたでも分かりやすいよう、ドアに大きなオレンジ色のダイバーシティマークを貼りましたので目印にしてください。(兼子)

東京都立大学 ダイバーシティ推進室
〒192-0397 東京都八王子市南大沢1-1 図書館本館1階
電話：042-677-1337(直通) / 内線2571 FAX：042-677-1355
E-Mail：diverwww@tmu.ac.jp
URL：http://www.comp.tmu.ac.jp/diversity/
発行日：2020年9月11日

コロナ下における障がい学生支援

5月からオンライン授業が始まり、障がい学生支援もオンライン授業に対応した取り組みを開始しました。

支援活動の中でボリュームの大きい聴覚障がい学生支援は、従来の支援スタッフによる支援が困難な状況のため外部の情報保障団体に依頼し、遠隔パソコンノートテイクを行いました。視覚障がい学生支援では、従来の教員への配慮依頼に例えば板書をデータで提供するなど、配慮の追加を依頼しました。一方、肢体不自由学生支援では一般の学生と同様の配慮を行いました。

このように障がい種別によって配慮内容は異なりましたが、オンライン授業への参加については、情報へのアクセスに困難がある学生はハードルが高くなり、移動に困難がある学生はハードルが低くなる傾向がありました。

一方で、本学は障がい学生と支援スタッフが時間と場所を共有し、お互いが理解を深めながら支援活動を展開することを心掛けてまし

た。物理的に場所を共有できなくなった状況の中でいかに理解を深め、共同性を育むかは大きな課題です。

これまでの活動で培った人間関係を活かして定例会、講習会、交流会などをオンラインに切り替えて実施していますが、新たなメンバーとの融合も今後の課題となるでしょう。またITスキルがこれまで以上に求められていることも痛感します。

先が見えぬ状況の中、課題山積ですがこの経験が新たな支援活動を形作るきっかけになるとも思っています。時代とともに私たちが新しい方を探し求めていきます。(横山)



パソコンノートテイク講習会 (基礎編・遠隔編)

6月17日からパソコンノートテイク講習会をオンラインで複数回開催しました。進行は宮崎優子さん、山口翔大さん(ともにシステムデザイン学部4年)が担当しました。講習会では1回目にIPtalkというパソコンノートテイクの専用ソフトの使い方と一人入力の練習、2回目にcaptiOnlineという遠隔パソコンノートテイクシステムの使い方と連携入力の練習を行いました。



対面開催と異なり受講生がパソコンの操作に戸惑った際に、すぐに対応できないことがありましたが、zoomの画面共有機能を活用し、講習会を進めることが出来ました。その後、情報保障団体による遠隔パソコンノートテイク支援を見学する機会を設け、早く入力するための事前単語登録など、支援の現場での工夫を学ぶことが出来ました。

オンラインでは様々なトラブルが想定され、またトラブルからの復旧も容易でないためより一層の事前準備が必要になります。後期は学生による遠隔支援に取り組む予定です。講習会も引き続き開催します。(横山)

ミニ手話講習会

残念ながらコロナウィルス感染拡大のため、前期の手話講習会を開催することが出来ませんでした。しかし、新入生を中心に手話を学びたいという声が多く寄せられ、7月10日と17日にオンラインで規模を縮小した形で開催することにしました。

講師は山口翔大さん(聴覚障がい学生)と横山正見が担当しました。パソコンの画面を通じて、手の動きや位置を伝えるのがやりにくく、対面では自然にできていたことが難しいことがありました。それでも、画像を鮮明にする設定やチャット機能を活用し、手話を教えることができました。

最後には、参加者が趣味や特技も含めて手話で自己紹介ができるようになりまし

た。オンライン独自の課題もありましたが、工夫次第で開催可能であることも分かりました。後期も、開催方法を工夫しながら手話講習会を検討いたします。(横山)



障がい者支援スタッフ制度説明会&歓迎会



例年より2ヵ月遅れ、6月8日に支援スタッフ制度の説明会をオンラインで開催しました。告知のためにダイバーシティ推進室のツイッター

を開設し、都立大の公式ツイッターにも掲載させてもらい、14名が参加しました。当日は小嶋久美子さん(理学部4年)と三堀遼太さん(人文社会学部3年)が進行し、前半に支援スタッフ制度の紹介、後半にグループに分かれて先輩との意見交換を行いました。こちらの操作ミスのため途中で切れてしまうトラブルがありましたが、大学に来られない状況でも

何かに取り組みたいという新入生の関心の高さがうかがえました。

そして、7月5日には新入生歓迎会をオンラインで開催しました。こちらは、末澤瑠里子さんと横倉恵美さん(ともに都市環境研究科2年)が進行しました。大学にほとんど来たことの無い新入生にzoomのホワイトボード機能を使ってキャンパスマップを描いてもらうなど、趣向を凝らした企画に盛り上がりました。新入生歓迎会では障がいのある学生も障がいのない学生も同じように楽しめる企画を行っています。今年はオンラインという条件も加わり、企画に苦労したと思いますが楽しいひと時でした。その後の懇談では、サークルとの掛け持ちは可能なのか、支援スキルはどのように身に付けたのか、などの意見交換がありました。

大学に来られない状況でも、アイデアと工夫で出来ることはたくさんあると感じる企画となりました。後期も交流を目的とした企画を開催していきたいと思っています。(横山)

障がい者支援スタッフ・利用学生 振り返りミーティング

ダイバーシティ推進室では、支援スタッフの活動を振り返り、より良い支援を作っていくための「振り返り会」を、半期に1回行っています。今期はオンラインでの開催となりました。振り返り会では、特にオンデマンド型の配信授業における情報保障の方法について、利用学生の意見を踏まえて具体的な方法を検討しました。



また、前期は動画の文字起こしや字幕の作成などが活動の中心でしたが、後期は授業の情報保障も支援スタッフが中心となって行うことが確認され、そのための講習会や練習会の実施も検討されました。

このほか、障がいに関して支援スタッフが考えたことや気になっていることを発表し、意見交換を行う場面もありました。この中で、直接会うことが難しい現在の状況だからこそ、何らかの形でつながりを作ることが大切だという意識が共有されました。時間や場所をどのように共有し、つながりを維持するか。ダイバーシティ推進室を運営する私たちが工夫すべき、重要な課題と言えるでしょう。(藤山)

障がい者支援スタッフ勉強会

7月29日に支援スタッフ勉強会を開催しました。今回は佐野朋枝さん(健康福祉2年)がホームスクーリング(学校以外で学ぶこと)について話しました。



佐野さんはご両親の教育方針のため、小学校から大学入学までホームスクーリングで学びました。学校には月1回登校し、主に家庭学習と塾や習いごとで学んだといいます。自分のペースで学べるメリットと生活リズムを整える難しさがあったそうです。高校時代にアメリカへの留学を経験しましたが、同世代での生活は大学が初めてのため、入学当初は戸惑いがあったそうです。しかし、大学でできることを思う存分取り組みたいと、勉強、サークル活動、支援活動等に積極的に関わり、充実した日々を送っているそうです。

質疑応答では、ホームスクーリングという学び方は疾病や障がいのある子ども達にとっても重要になるのではないか、との指摘がありました。今後とも支援スタッフの話す機会をつくっていききたいと思います。(横山)

「コロナ」下の支援活動

先日、久々に南大沢キャンパスの図書館本館に足を運びました。休み期間は図書館で勉強することが多かったのですが、現在はCOVID-19対策で様々な制限があり、普段通りの学生生活はまだ厳しいのだなど実感したところです。

私はダイバーシティ推進室で障がい学生支援を始め、3年目になりますが、授業形態の変化に合わせて支援活動も大きく変わっています。今年度前期は、オンライン授業のパソコンテイク支援が外部団体に委託され、学生スタッフは主にオンデマンド授業の文字起こし支援を担当していました。後期はオンライン授業も基本的には学生スタッフが担当する予定で、勉強会などを開いて試行錯誤しながら活動していきたいと考えています。

一学生としても支援スタッフとしても例年とは異なる学生生活を送っている状況ですが、一方でポジティブな側面もあります。学生としては、授業中に積極的に調べものができたり、オンデマンド授業を繰り返し聞くことができたり、勉強の質を高めるられる可能性があると感じました。障がいのある学生の方も自由度の点で良いと感じることもあったと感じました。また支援活動では、「captiOnline」というウェブサービスやYouTubeの字幕機能など新しい形の支援のあり方を学ぶことができています。現在の状況がいつまで続くかわかりませんが、通常のキャンパス生活に復帰した後も、「コロナ」下での経験を支援活動に生かしていければと思います。



障がい者支援スタッフ
人文社会学部人文学科
歴史学・考古学教室3年 三堀遼太

コラム

ダイバーシティとスポーツ 〜デフリンピックをこぼす〜

「デフリンピック」をこぼすでしょうか。国際ろう者スポーツ委員会(ICSID)が主催して4年に1度開催される、聴覚障がい者による国際的なスポーツ競技大会です。夏季大会は1924年にフランスで、冬季大会は1949年にオーストリアで始まったと言いますから、その歴史はパラリンピックよりも古いことになりまし

ます。デフリンピックという名称になったのは2001年のことです。国際オリンピック委員会(IOC)が名称や商標を厳しく管理している現代にあって、「オリンピック」の名称を使うことができるのは夏季・冬季のオリンピックと身体障がい者などによる「パラリンピック」、知的障がい者による「スペシャルオリンピックス」と、このデフリンピックしかありません。

デフリンピックの競技は、スタートの音や審判の声による合図を光などに置き換えて視覚的に工夫する以外は、オリンピックと同レベルで運営されています。そうした意味で、デフリンピックはもともと競技性を重視した、ハイレベルな国際大会として行われてきました。その一方で、参加者が国際手話を用いてコミュニケーションを図る、国際的な交流の場としても機能しているそうです。(*)

*1...一般財団法人全日本ろうあ連盟スポーツ委員会 <https://www.jfd.or.jp/sc/deaflympics/games-about>
*2...2020年7月に開催された第83回東京国際上肢選手権大会では、光でスタートの合図を伝える「スタートランプ」が用いられ、聴覚障がい者と健聴者のアスリートが同じレースで競う場面がありました。